

東洋史研究

第三十八卷 第一號 昭和五十四年六月 發行

インドネシア共産黨武力蜂起の失敗と

メッカ巡禮者との關係 (二九二六—二七)

永 積 昭

はじめに

- 一 サウディアラビアの建國とその國際政治への影響
- 二 ソビエト連邦の巡禮對策とインドネシア共産黨
- 三 PII等關係者八人の逮捕
- 四 むすび—事件の結末と意義

はじめに

イスラム教の聖典『コーラン』は、信者が果たすべき義務として、信仰の告白、禮拜、斷食、喜捨、聖地巡禮の五つを擧げている。ただしこの中で最後の聖地巡禮は、健康で經濟的餘裕のある者に限って課せられた義務であったが、敬虔なイスラム教徒にとって、メッカの大祭に参加することが一生の念願であったことは、想像に難くない。

インドネシアはマレーシアと共に、東南アジアにおいてイスラム教の最も盛んな國である。インドネシアのイスラム教

徒は全人口の九割を占める、としばしば言われる。中部・東部ジャワのイスラム教のように、他の諸宗教と融合して、獨特の變容を遂げている場合もあるので、この數字をそのまま信じるわけには行かないけれども、西部ジャワやスマトラにおけるイスラム布教がはるかに徹底して行われたことは明らかである。

そのよい例が、インドネシアおよびマレーシアのイスラム教徒が聖地巡禮に示して來た熱意である。そもそも全世界のイスラム教徒の分布から見て、この兩國は地理的に最も遠く位置していると言つても過言ではあるまい。それにもかかわらず、すでに十七世紀ごろから、土着君主はしばしばヨーロッパ諸國の船にみずから乗り、あるいは代理の使節を乗せて聖地巡禮を行なった。時代が下るにつれて、この風習は王族のみならず一般にもひろがり、とくに一八六九年のスエズ運河開設以後、イギリス、オランダなどの汽船會社が、紅海中央部のアラビアの港ジエッダに定期船を航行させる様になると、巡禮者の數は急増した。

オランダは、イギリス、フランス、ロシア（のちにはソビエト連邦）、ペルシアなどと共に、自國民がメッカ巡禮と密接な關係を有する國の一つであつたので、これらの諸國と同様、ジエッダに領事館を置き、檢疫を口實として、自國民の出入港を管理していた。そのため一八七八年から一九三八年までのインドネシア出身の巡禮者總數の統計があり、これはオランダ政府發行の『東インド報告』(Indische Verslag) 末尾の表に毎年收められている。オランダの社會學者フレーデンプレヒト(J. Vredendregt)はさらに他の史料をも參照して一九四〇年までの統計を作成し、彼の論文の末尾に附録として載せている^①。彼自身もこの表の解説で述べている様に、この數字はインドネシア以外、(すなわちシンガポール、ベナン、ジエッダなど)でパスポートを取得したインドネシア人を必ずしも含まぬ場合があり、また全くパスポートを持たずに入港する者は記録に現われないので、あくまで概數を示すに過ぎない^②。まして、この統計に併記されている、全世界からの巡禮者總數は「不明」の年が五回もあり、その信頼度はさらに限られて来る。しかし、その點に留意しつつ兩者の數字を比較すれば、幾つかの興味深い事實が分る。まず、この六二年間のインドネシアからのメッカ巡禮者總數は實に六七萬人に達し

たのである。この中に前述の變則ないし不正入國者が含まれていないこと、またこの他にマライ半島その他のイギリス植民地出身者が多數いたことを考えれば、これは驚くべき現象と言えよう。

次に、全世界からの巡禮總數の中で、インドネシア出身者は常にかなり高い比率を占めていたことが分る。インドネシア出身者が史上最高の數に達したのは、イスラム暦一三四五年（西曆一九二六年七月二日—二七年七月一日）の五二、四一二二人であり、この年の全巡禮者數の四二・六パーセントに當る。またパーセンテージだけを問題にするなら、イスラム暦一三三二年（西曆一九一三年一月三〇日—一四年二月一九日）は同年の全巡禮者數の丁度五〇パーセントに達し、これが最大の數字である。全時代を通じての百分比の平均は一八・〇五パーセントで、必ずしも多い率とは言えないが、地理的な距離や、しばしば起こったアラビア半島内部の政情不安、戰亂による海上交通の杜絶等を考えに入れば、やはり注目に値するであらう。しかも、この中には、イギリス領のマライその他の植民地や、他の東南アジア諸地域からの巡禮者は、一切含まれていないのである。

私の當面の課題は、巡禮の全期間を通觀することではない。それについてはすでに一八七三年にヘルヴェルデンが、『メッカへの巡禮行』という小冊子を著わして以來、管見の及ぶ範圍でも、エイゼンベルヘル、アブドゥル・パタ、ブスケなどの著書があり、また前述のフレーデンブレヒトの論文は一九六二年に書かれ、社會學的方法を用いた優れた分析の成果を示している。従つて同じ史料に頼っている限り、これらの研究に新しい何物かを付け加えることはほとんど不可能であらう。

そこで私は、一九二六年七月から二七年七月に至る巡禮シーズンに視野を限り、メッカ巡禮者に對するインドネシア共產黨の宣傳活動という問題を論じることにする。これについての最も基本的な史料は、言うまでもなくオランダ王國植民省と外務省の文書である。このうち外務省のアラビア及びエジプト關係文書は「大使館文書」(Embassy Archives)と呼ばれ、ハーグの外務省分室倉庫にあるが、整理が極めて悪く、現在は閱覽不能である。國立文書館及び王立圖書館の新館が

完成する一九七九年には利用可能となる様に聞き及んでいる。また植民省文書は、戦後の植民省廢止に伴ない、一九〇〇年以後の同省文書は内務省文書課に移管されている。この文書の根幹をなす『公式報告』(Verhaal)は公開の部と祕密の部の二種に分けられ、一九六三年ごろから、年代順に古い文書から閲覽が許される様になった。^④今回研究の対象とする時期の『公式報告』が解禁になったのは一九七〇年代の初めごろであり、私は一九七八年の四月から七月までの四カ月間、この文書を利用することが出来た。これに次いで重要だったのは同國ライデン市の王立室譜・地理・民族學研究所(Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde)に收められている『ホベール・コックシオン』(Collectie Emile Gobée)である。これはイスラム學の大家で長い間「原住民問題顧問官」を勤めたエミール・ホベールが生前に集めていた文書を同研究所に寄贈したもので、前述の『大使館文書』に含まれながら閲覽出来なかった毎年の『巡禮報告』のうち、數年分はこのコレクションに含まれていて、利用することが出来た。^⑤これら兩機關、ならびに私のオランダ滞在についてフェローシップを與えてくれた「ライデン大學基金」(Leide Universiteitsfond)に、深甚な謝意を表する次第である。またこの研究は、私が屬している特定研究「東アジアおよび東南アジア地域における文化摩擦の研究」の中の「文化の傳播と摩擦——東南アジア」班に協力しつつ、かつその刺激を受けつつ實施したものであるが、研究自體は終始私個人が行なったものである。従つて文中に不備がある場合は、すべて私の責任であることを、ここに明記しておきたい。

一 サウディアラビアの建國とその國際政治への影響

聖地巡禮者激増の背景として、この時期のアラビア半島における政治情勢の變化に、一言觸れておかなければならない。

第一次世界大戦中、聖地メッカのシェリフであつたハシム家のフセインは、數世紀にわたるオスマーン・トルコ帝國の支配を脱して、獨立を宣言し、紅海沿岸のヘジャス地方を制した後、一九一六年十一月、「アラブ國」の王として即位した。^⑥當時トルコはドイツ側に立つて參戰しており、フセインはイギリスの援助を得ていた。しかし、半島中央部のネジド

地方に勢力を布くサウド家は年來ハシム家と敵對關係にあり、フセインが「アラブ國王」を僭稱したことに憤慨していた。^⑦さらに一九二四年三月、フセインが獨斷でカリフの位についたことは、イスラム世界内部に大きな不満をまき起した。この機會に乗じてサウド家のイブン・サウドはメッカに入城し、敗れたフセインは逃亡した。^⑧

ジェッダ、メディナの征服も終り、一九二七年一月四日、イブン・サウドはヘジャスの王となった。^⑨やがて一九三二年九月十八日、彼の版圖はサウディアラビアと改められ、彼はその初代國王となるのである。^⑩サウド家は原初イスラム教の精神への復歸を説く、いわゆる「ワッハーブ派」に屬し、ムスリム同士の連帶を説く一方、宗教に政治が介入することには強い警戒の念を持っていた。^⑪軍規の正しいサウド軍により、聖地周邊の治安は回復され、巡禮者の數は再び増加し始めた。

サウド家によるアラビア全土の統一は、ヨーロッパ諸國の對アラブ政策にも大きな影響を及ぼした。なかでも、この地域に最大の關心を持つイギリスの動搖は大きかった。イギリス外務省のアラビア局は「アラビアのロレンス」の助言に従ってフセインを支援しており、一方、同省インド局およびそれにつらなるインド總督府、植民地省は、別のアラブ通フィルビー(Henry St John Philby)の意見を用いて、早くからイブン・サウドの將來を有望視していた。^⑫サウディアラビアの成立は、イギリス外務省内での後者の路線の勝利を意味したが、從來の行きがかり上、サウド家との折衝が圓滑を缺くことになり、外交上大幅な後退を餘儀なくされたことは言うまでもない。

他方、イギリスと同じく第一次世界大戰の勝者となったフランスは、アラビア半島よりもシリア、レバノンおよび北アフリカ方面に深い關心を示していたため、サウド家とハシム家の勢力逆轉によってさほどの影響を受けず、また特に新しい反應を示さなかった。^⑬

ところが、これに對して大いに有利な立場に置かれたのが小國オランダであった。イギリスの場合、さきに述べたロレンスとフィルビーとの意見對立があつたのにひきかえ、オランダ政府のイスラム政策は、當時イスラム學の世界的權威で

あつたC・スヌーク・ヒュルフローニエ(C. Snouck Hurgronje)の助言に負う所が多かつた。^⑭ スヌークは一貫してイブン・サウドを支持し、その將來性を強調していたために、サウディアラビア樹立後、イブン・サウドはその友好的姿勢を多として、特にオランダを優遇する態度を見せたのである。

オランダの外交上の優越は、しかし單なる幸運によるものではなく、周到な配慮によつて裏打ちされていた。^⑮ 一九二八年四月二十七日にジェッダ駐在オランダ領事D・ファン・デル・ミューレン(D. van der Meulen)が書いた一九二六—二七年期の『巡禮報告』(Bedevaartsverslag 1926—27)によれば、このころイブン・サウドは長子サウドをエジプトへ、次子ファイサルを、英・佛・蘭三國へ派遣して、これらの國々が自分をヘジャス王として正式に承認してくれたことへの答禮を行なつた。この時、イギリスは外交路線の混亂も禍いして歡迎ぶりは冷淡であり、サウド家と親しいフィルビーは個人的にはよく盡力したが、皮肉にもそのために公式政府の側の無關心ぶりが非常に目立つたと言われる。またフランスでは故意ではなく無知から、この使節團のバリ訪問に際して何の公式日程も立てていなかったたので、知らせを聞いてイギリスから急行したフィルビーが代つて一行を數日間案内する始末であつた。^⑯

これにひきかえ、オランダ政府は毎日入念な行事を準備し、ファイサル王子を重視していることを十二分に示した。特にウィルヘルミナ女王との謁見や、スヌーク・ヒュルフローニエの優れたアラビア語の學力は、王子を深く印象づけたらしい。王子は同行した報告の筆者ファン・デル・ミューレンからスヌークの印象を聞かれて、

スヌーク教授はモハメダンでしょう。兄弟のみがこれ程よく我々の習慣を知り、また私にふさわしいものを私に與えるすべを心得ています。彼は私より純粹なアラビア語を話します。^⑰

と激賞している。このためジェッダのオランダ領事館は、イブン・サウド王から同地のイギリス領事館との間にある敷地を贈られ、またオランダの植民地開發會社であるオランダ「貿易會社」(Nederlandse Handel maatschappij)や、二、三の銀行も他國に先がけてジェッダに支店開設を許された。^⑱ またサウド政府は海外への支拂い機關としてオランダの銀行を選

び、かつ關稅收入も同行を通じて納入させていた。^⑨従つてヘジャス地區における銀行業務はオランダの獨占となり、最初巡禮に關する業務を豫想して開設されたこれらの支店は、金融その他一般銀行業務の方で一層大きな利益を擧げ、巡禮關係業務は副次的なものとなつてしまつたと考えられる。^⑩しかも、サウディアラビア政府の好意的待遇はこれだけではない。オランダのジェッダ駐在領事は他國領事と同様、メッカの聖域に入ることを許されなかつたが、一九一二年になると、停年退職したジャワ人ラデン・アブ・バクル (Raden Abu Bakr) という人物を領事館の囑託としてメッカに常駐させることが出来る様になり、さらに一九二四年以後はジャワ人のムスリムから任命された副領事一名をメッカに常駐させるのが慣例となつた。この副領事は公式にはジェッダの副領事であり、イブン・サウドはイギリスから同様の要求が出ることを恐れて、この案には非常な難色を示したと伝えられる。しかし、ともかくこれは默認されたのであり、同様の特權は他の國に許されることがなかつた。^⑪これによつてオランダは、自國植民地の原住民がメッカに形成したいいわゆる「ジャワコロニー」や、さらに聖地の一般狀勢について他國の追隨を許さない情報を得ることが出来たのである。

二 ソビエト連邦の巡禮對策とインドネシア共產黨

メッカ巡禮に深い關心を示した西洋列強は、單に英、佛、蘭の三國だけではなかつた。東ヨーロッパの大國ロシアは領内に多數のムスリムを擁し、すでに帝政時代からその管理に力を注いでいたらしい。明治四二年（一九〇九年）一二月の大祭に最初の日本人としてメッカ巡禮を行つた山岡光太郎は、ジェッダでの印象を次の様に記している。

同行者の舊友にしてデッダ露國領事館書記生某を訪ふ。某は韓艮人にして回教徒なり。此地に駐在すること既に二十有餘年なりといふ。某に三子あり。内二名はトルコ陸軍に奉職する將校にして、目下主都に勤務せりと。白髮童顏の好老爺、身は露國の俸祿に衣食しつつ、我戰勝を欣羨祝賀し、宗國を熱罵痛笑するところ、本氣の沙汰と思はれざれども、其出生のアジア民族に出で、世襲的報復の血性遺存すを思はば、又不可思議にも非ざらんか。^⑫

この人物の名を知ることには残念ながら不可能であるが、帝政ロシアの巡禮政策の一端をうかがうに足る史料と言えよう。社會主義革命によって成立したソビエト連邦も、メッカ巡禮の持つ意義については深い関心を持ち続けた様である。ジエッダのソ連領事館は存続し、一九二六年ごろはハキモフ (Hakimov) なる人物が領事であった。イギリスその他の外交筋によれば、ソ連領事館はモスクワからクーリエ (傳令使) によって定期的に指令を受けており、一介の領事館に對してこういう出費のかさむ政策がとられるのは、極めて異例なことであった。^④

オランダのカイロ駐在公使館はすでに一九二五年ごろから、ジエッダのソ連領事館の宣傳活動に注目し、本國外務省に報告を送っていたと言われる。^⑤

イギリスのカイロ駐在高等辨務官も、ソ連領事館の宣傳活動が英領インドの民族主義運動に影響を与えているものと考へ、一九二六年五月以來、ハキモフをジエッダから遠ざける様、種々工作を試みていた。^⑥ 彼は同地のオランダ代表筋と、この問題について論じている。

丁度この噂を裏づける様に、インドネシアでは一九二六年一月一二日に、ジャワ西部のバタヴィアおよびバンタムにおいて、共產黨員による武裝蜂起が始まり、一二月中旬までの間に政府軍によって鎮壓された。その知らせは逐一全世界に伝えられた様である。一九二六年一月二八日附のカイロの新聞『アル・アハラム』はフランスの新聞『レ・デバ』の記事を引用して、ソ連のジエッダ駐在領事館員の活動を詳細に説明し、

この職員の仕事はムスリム巡禮者達の間に共產主義思想を廣めることにある。多數の使者が彼等の乗船の到着に際して巡禮者を迎えに行き、ジエッダの港からメッカまで同行して、文字の讀める者の間に宣傳文書を配布し、共產主義とヨーロッパ憎惡への誘いで、彼等を元氣づける。^⑦

と記している。現地から遠く離れた所での記事であるために、あたかもインドネシアの武裝蜂起が専ら聖地周邊でのソ連の宣傳によって起こったかの様な印象を、讀者に與えたとしても不思議はなかつ

事件發生直後、サウディアラビアの外務大臣ダムルージはオランダ領事と接觸し、『アル・アハラム』紙の報道を根據薄弱と見なしつつも、オランダ側の調査を依頼している。サウディアラビア政府としては、「メッカやメディナに反オランダ運動の温床が出来たという印象を外部に與えたら、如何に不利になるかを熟知していた」のである。従つて萬一この様な事實があれば、斷乎として阻止するという決意をオランダ側に傳えたのであった。オランダ側も、

もしこの國で反オランダ宣傳が公けに許されている様に感じられれば、勿論東インド政府はその國民をもはや巡禮に送り出すことを許さないだろう。^④

と答えている。

當時メッカ在住のインドネシア出身のムスリムの間に次の二つの團體が結成されていたことが、ジェッダ領事ファン・デル・ミューレンからバタヴィアの總督への一九二七年六月一七日附報告で分る。^⑤この報告の原文はかなり長いものなので、その全文の代りに大要を記せば、次の通りである。

領事は副領事からの上申に基づき、この團體を、それぞれ SBI (Sjleich Bond Indonesië インドネシア・シェイク同盟) および PII (Perserikatan Islam Indonesië インドネシア・イスラム協會) と呼んでいる。兩團體とも西部ジャワのタンクアン・ガルト出身の共産黨員マハダル (Mahdar) という人物が議長を勤めていた。このマハダルは一九二六年一月一二日深夜に西部ジャワのチャミスで起こった蜂起に参加した後、逃亡した人物で、パスポートも切符もないまま、ネマゼー汽船會社の汽船アルメニスタン號で、密航者としてジェッダに到着したらしい。

さて、二つの團體のうち、SBI は一報告者に從えば一執行部はすべて共産主義者であり、巡禮のためのシェイク、アバス・イラギ (Abas Iragi) なる者がインドネシアから同行して來た巡禮者を迎え、その中から共産主義運動に適した人々を選び出す「一種の選擇機關」であつた。シェイクの側ではこの團體を自分のものと心得、自己の名を冠して呼んでいたが、執行部とシェイクとは對立しており、シェイクは SBI に紹介する際に一人當りオランダ貨で二ギルダー五〇セン

ト受取るだけで、それ以上はかかわりを持たない、とのことである。

こうして運動に適し、またそういう志向があると見なされた人々は、第二の團體即ちP I Iのメンバーになる様に働きかけられる。今年の巡禮シーズンが終った後、S B Iの三人の執行部メンバーは、S B Iのために巡禮を獲得する目的でインドネシアへ歸ることを豫定している。こうして共產主義者を組織するための新しい中心を得るだけでなく、シェイクの事務の一部を代行することによって資金源を得る。直接その金を入手するのはS B Iであるが、それはP I Iの行動に使われる。^⑧

このような活動がオランダ植民地政府から怪しまれなかったのは、ジャワに既に久しい以前から計畫されていた「みずから巡禮を行なう團體」(eigen hadi organization)のためであつたらしい。この團體はインドネシア巡禮者から暴利をむさぼるアラビアのヘジャス地方のシェイク達を閉め出すために計畫されたものであつた。そのため人々はS B IやP I Iの動きをこの團體のためのものと思ひ込み、あまり疑いを抱かなかつたのであらう。

S B Iは三人の指導者をジャワまたはシンガポールに行かせるための資金を集めていた。一人につき三〇ギルダーが必要であつた。またP I Iは宗教團體の形を取り、議長は前述のマハダル、宗教教師はスマトラ西岸出身のジャン・タイブ(Djann Taih)という人物であつた。タイブはカイロのアズハル大學の免状を持っていた。彼は新聞記者という資格でカイロに現われ、武器の輸入についての情報を送る手筈になっており、その場合にはP I Iの執行部の一人はアリミンやタン・マラカと接觸するためにカイロに派遣され、また別の一人はセマウンと接觸するためにソ連に派遣される計畫であつたと言われる。

このほかP I Iはジャワのキャイ(宗教教師)の仲介で、故郷の同憂の士たちと文通しようとしていた。キャイは巡禮振興のため平素から通信をさかに行なっているので、當局の嫌疑を受けることが少なかった。この文通の意圖は「恐怖にとらわれ、または打撃を受けた兄弟たちを再び鼓舞し、新しい勇氣を與えること」であつた。^⑨このP I Iこそ「東イン

ドを共產主義へと育成するための中心組織」と考えられていた。

以上がインドネシア共產黨の殘黨によつて組織されたと言われる二つの團體の活動および相互關係についての、ファン・デル・ミューレンの報告である。彼は一九七七年に刊行した回顧録『君には雷鳴が聞えないか?』の中で、第一回のアラビア在任時代（一九二六—三二）に一三頁を割いているが、この二團體についての説明は全部省略されている。また他の關係者の報告はもとより、彼自身の數多い報告の中でも、この點に詳しく觸れたのは一九二七年六月一七日附及び二二日附（附錄參照）のものだけである。しかし報告が首尾一貫して論理的、かつ具體的である所から見て、私は恐らくこの二團體は實際に存在したものであらうと考える。このことは一九二七年五月一八日、オランダ東インド總督府第一書記が各地區行政長官への通達の中で、次の様に述べている事からも裏づけられる。

今年の巡禮者の中に各種の過激主義者（extremisten）がいることを、總督は承知している。彼等は巡禮に旅立つことを、一層の追及をくらすための手段にしようとしている。彼等がメッカで組織を作っており、また彼等〔自身〕及び〔他の〕巡禮者を介して、〔東インドにおいて〕その宣傳を復活させようとしていることは明白なので、總督は歸國した巡禮者達を監視する必要があると感じておられる。

ところで、この様なインドネシア共產黨殘黨の活動は、どの程度コミンテルンの指導ないし了解のもとに行われていたであらうか。前述のソ連領事ハキモフに對する英蘭兩國の外交官筋の推測にもかかわらず、私にはその可能性は薄かったとしか思われない。何故なら、すでに多くの研究者が指摘している様に、そもそもインドネシア共產黨の武裝蜂起そのものが、コミンテルンとの連絡不十分のまま、その方針に反して行われたからである。

三 P I I 等關係者八人の逮捕

P I I はハシム家のフセインに取つて代つたイブン・サウドの統治を評して、フセインの治世よりも悪いとして大いに

非難していた。すなわち、フセインは治安の點で劣る所があった代りに言論や思想の統制を行わず、巡禮者達の宗教的見解を全く自由に放任した。ところが、イブン・サウドは道路の通行を安全にした代りに、巡禮者達から通行税を徴收し、さらに彼等の宗教的見解を統制、ないし抑壓した、というのである。それ故、P I I は同様の不満を持つアラビア在住のイラン人やインド人に對しても、政治的煽動を試みていた。

P I I の他の活動は聖地周邊の水運び人足 (gallies) にも向けられた。人足は激しい労働をしているにもかかわらず、一人當り毎月一五グルーシユの税を取立てられ、生活が樂ではないので、彼等を組織してストライキをさせるであろう、と P I I は公言していた様である。このような情勢分析が果して正しいものであったか、又かりに正しかったとしても、ストライキなどが實行可能であつたかについて、我々は全く判斷の材料を持たない。ただひとつ言えるのは、このような P I I の活動がサウディアラビア政府の心證を害したであろう、ということである。ファン・デル・ミューレンはこう記している。

當地の政府は、「P I I の」關係者達が自己の出身國において犯したかも知れぬ事柄に關しては、干渉しないことに決めた。しかし、この國で宣傳活動をすることは許すまい、と約束された。政府は上記二團體〔S B I と P I I〕の指導者達を檢舉することによつて、「オランダ政府への」約束を守つた。

しかし、兩團體の檢舉に踏み切るまでのサウディア政府の内情は、かなり複雑なものであつたらしい。既に述べた如くサウド家及び外務大臣ダムルージの親オランダ感情は明白であつたが、一部のオランダ人は、政治的手腕に長じたサウド王が共產主義宣傳を「パン・イスラミズムのための目的になつた手段」として抜け目なく利用するだろうと推測していた。イギリスの外交筋でも、「私はイブン・サウド王は〔共產主義〕宣傳やその結果について少しも意に介しない、一種の傳統的首長と見ている」などの意見もあり、サウド王の外交の變幻自在ぶりについては、既に定評があつた。しかも外務次官フアード・ハムザ (Fuad Hamza) は、はつきりと反オランダ的であつたし、さらに關係の多くはシリアからの亡命者

で、故國でのフランスの壓政に苦しんでいただけに、反植民地主義の色彩が濃かつた。^⑥ そのためオランダのジェツダ領事ファン・デル・ミューレンですらその直前の一九二七年五月一八日には、

イスラム國政府はキリスト教の西歐政府——しかも同じイスラム教徒數百萬人を支配している政府——に反對する宣傳を行なっているとの理由で、「アラアの客人」をその國から追立てることに、容易に踏み切るまい。このように、彼等はその約束の結果をおのが身に引受けようと欲しないのだから、我々の政府にこのことで干渉されることを、極めて不愉快に思うだろう。^⑦

と記しているほどである。それにもかかわらず、アラビア政府を遂に幹部逮捕へと踏み切らせた理由は何であらうか。SBIおよびPIIの活動が政府を憤慨させたことも一因ではあろうが、恐らくは、巡禮の最大の供給者たるオランダ政府を硬化させればサウディアアラビアの國庫収入にも少なからぬ影響が及ぶだろう、との考慮が働いたからであらう。いずれにせよ、政策決定の全權はサウド王の手中に握られていたのであり、閣僚その他の反對意見は結局沈黙を餘儀なくされたのである。

幹部逮捕を示唆する第一報は、同年六月四日にジェツダ領事がバタヴィアに打電した佛文の電報であつた。この中ではまだ「アラブ政府は指導者を逮捕するであらう」と記されているだけであるが、^⑧ 前に紹介した六月一七日の報告では、既に逮捕は行なわれたものとして、「議長マハダルはまだ逃亡中である」と記されている。^⑨ この報告は最初に捕えられた六名について次の様に記している。

- 1 スタン・ムンチャク (Soetan Moenjak) スマトラ西部のパダン・パンジャン出身。彼はスマトラ西海岸において、既に指導者の一人であつた。彼はパダン・パンジャンとソロクの反亂に参加した。
- 2 パキ・リパット (Pakih Ripat) ソロク出身。ソロクの反亂の指導者。
- 3 マルフム (Marhoem) パダン出身。PIIの會計係、會員カードを賣る係。

4 アブドゥッラー・カミル (Abdollah Kamil) パナマン・パダン出身。P I I の書記。

5 スマディサストラ (Soemadisastra) S B I の書記。彼はジャワにおいても嫌疑を受けたが放免され、(當局により) スパイとして使われた。

6 ガンダ (Ganda) バンドウンのウジュン・ブルン出身。バンドウンで二日間監禁され、スパイとして利用するために釋放された。S B I の會計係。

また、その後

7 ハジ・タンスイ・グラル・バギンド (Haji Tangsi gelar Bagindo) 別名アブドゥルラハマン (Abdoerrahman)

8 ブシロ (Besiro)

の二人が逮捕され、結局合計八人に達している。^⑤一方、「メッカにおける共産黨活動の本來の指導者兼組織者」と目されていたマハダルは逃亡を續け、遂に逮捕を免れることとなった。「問題のメッカ團體の指導者達、は警察の目を逃れた」と領事の「巡禮報告」が特に複數で記している所を見ると、マハダル以外にも逃げおおせた者はいたかも知れない。しかしこれ以後その活動は絶えた様である。

ジェッダ領事ファン・デル・ミューレンは六月二〇日夜、ジェッダ警察の木造廳舎において、全員を一人ずつ訊問し、二二日にその結果をバタヴィアの總督に書き送った。その全文を末尾に附録として掲げる。

これによれば、西部スマトラ出身者五名、西部ジャワ出身者三名で、皆一樣にS B I およびP I I の二團體との關係を否認している。マハダルと面識があることを認めた場合でも、その評價は大體において否定的で、「彼のために一生を誤まった」という調子が全部に共通している。一四日間に及ぶアラビア政府の留置場での苛酷な待遇が、彼等を萎縮させたこともあるが、たしかに彼等がインドネシア共産黨の中樞において重要な役割を果す程の人物でないことは、誰の眼にも明白であった。武裝蜂起に際して各自の地區での指導者であった者は少なくないが、この事實は第一に黨の執行部が地

方支部から遊離していたこと、第二に個々の反亂が共產主義のイデオロギーやコミンテルンの指令とは殆ど無縁の青年達によって開始されたことを示すものに過ぎない。従つて、彼等のメッカ潛入をインドネシア共產黨の組織的行動と見ることは到底無理と思われる。成程SBIとPIIは八人が檢舉された後も、多少の活動を續けたかも知れないが、これらのささやかな組織に、聖地における共產黨再建などという放膽な夢が託されていようとは、到底思われない。そして、たとえその期待がかけられていたとしても、それはこの八人の檢舉と本國送還によつて、事實上終りを告げたと見てよい。

「彼等が一隻の巡禮船で護送されることは、一五〇〇人もの歸國する巡禮者と接することになるので、望ましくない」というジェッダ領事の意見にもかかわらず、八人は六月一七日にオランダ船シンケップ號一隻に乗せられて、スマトラ北西端に面する小島サバンに送られた。「二―三の者は無罪、他の者は微罪」とのジェッダ領事の豫想通り、「八人の中七人は釋放された」様であるが、彼は最近發行された回顧録では「大部分の者はディグルル送りとなつた」と記している。或いは一旦釋放され、暫く經つてから別の理由で流刑に處せられたものであらうか。それとも作者の記憶違いであらうか。この點について語る史料は、今までの所見當らない。

四 むすび——事件の結末と意義

サウディアラビア政府は國內においてはこの檢舉事件についての批判を、嚴しい言論統制によつて切り抜けたが、海外の新聞は「イブン・サウド王が西歐植民地勢力を助けて、ムスリム人民の解放運動を阻止した」として烈しく非難するものが多かつた。^④王に抗議電報を寄せる例も見られ、とくにカイロのアズハル大學在學中のインドネシア留學生からの不満表明が目立つた。

このような反應はサウディアラビア政府の豫想を越えたものであった。政府は直ちに聲明を發し、「八人の引渡しはオランダ政府の要請によるものではない」と言い、また「彼等はオランダ領東インドで法を破つたために追放されるのでは

なく、メッカにおいてこの國の安寧秩序を亂す目的で團體を組織したからだ」と説明して、辯解につとめたが、その立場は明らかに苦しいものであった。^⑤ そのため、サウディアラビア政府はオランダ東インド政廳が要請した數人の個人を檢舉することにほやは殆ど協力しようとせず、逆に「今後は不法行爲者が聖地に來ることを防止する様に」とオランダ政府に要請する有様であった。これによつて全ムスリム世界は、「メッカは西洋の征服者達の支配を覆そうとする植民地出身者の行動にとつて、安全な場所ではない」ということに氣づいたのであり、これ以後はメッカに代つてカイロがその中心と見なされるに至る。或るマライ人の學生が後に述懐した様に、「メッカでは宗教しか學べなかったが、カイロでは政治も學ぶことが出來た」わけである。^⑥

一方、オランダ政府にとつても、この事件の後味は苦いものであった。カイロのインドネシア留學生は同地のオランダ外交部に著しい不信の念を抱き、またメッカ駐在の副領事と同地の「ジャワコロニー」の青年達との接觸は失われた。ジエッダ領事は「巡禮報告」の中で、

我が政府はこのこと〔引用者註—メッカが民族主義運動の中心として不適當であるという認識が一般に徹底したこと〕についてイブン・サウド政府に感謝してよい。一方、二度とこういふ〔引用者註—政治犯逮捕の〕要請をすべきでないことは銘記さるべきである。ムスリムの聖地の支配者としての彼の困難な立場のゆえに——結果論になるが——メッカにおける共產主義運動は別の形で防止さるべきであった。^⑦

と記して、輕擧を悔んでいる。

結局、メッカ周邊におけるインドネシア共產黨の宣傳活動は、オランダ政府にとつて大した脅威となり得るものではなかつたし、しかも、上記八名の逮捕によつて將來もその可能性は殆どなくなつたわけである。オランダ政府が國際世論を刺激してまでその監視や取締を行なう必要を感じなくなつたとしても、當然であらう。

その結果、インドネシアのメッカ巡禮者の取締は、依然論議的とはなりながらも、少々緩和された氣配もある。植民

地政廳に對するムスリムの煽動に口實を與えないために、歸國時の荷物検査を從來の様に全員については行なわず、とくにジェッダから連絡のあった要注意人物のほか「數十人程度の」荷物を、豫防措置として検査するにとどめることにした。^⑤

また、今まで全巡禮者は歸國後直ちに居住地のレヘント (Regent インドネシア語では bupati 日本占領時代には「縣長」と譯した) または地區長 (distrikhoofd インドネシア語では wedana 日本占領時代には「郡長」と譯した) に報告することとなっていたが、これは普通の巡禮者にとって負擔であるだけでなく、危険分子は簡単に免れるから無意味であるとして、これを「定住地に到着後七日以内に」届け出ることに改めた。^⑥ この様な措置は、インドネシア共産黨の武装蜂起の後始末が完全に終つたと見た、オランダ東インド政廳の安堵感の現われである様に思われる。

ジェッダ領事ファン・デル・ミューレンは、回顧録の中で過激分子のメッカ巡禮に觸れ、「彼等は三つの誤算をした」として、次の様に述べている。

一、イブン・サウド支配下のメッカはどの様な政治運動にも適さなかった。王は極度の正統派、イスラムの清教徒の指導者であり、メッカを再び眞の「聖都」とし、あらゆる政治活動を排して宗教だけの場所にしようとした。

二、彼等がメッカで會つたロシア人達は彼等を助ける氣はあつたがその能力を缺いていた。派遣されていたのはイスラム教徒のロシア人であつたが、彼等はまず第一に共產主義者であり、従つて無神論者であつて、彼等の父祖の宗教をよく知らなかつた。メッカで植民地出身の巡禮者達に反植民地闘争のための宣傳が簡単に實施出来るだろうという彼等の期待は、大きな誤算だつた様に思われる。

三、オランダ領東インドの裁判官の手はイスラムの禁斷の都の中にまで及んでいた。それは我が領事館に配屬されたインドネシア人官吏の忠誠によって可能となつた。彼等はムスリムであるためにメッカに自由に出入りを許されたし、當時のメッカの清教徒的政權が、政治的、さらには反西歐的運動にどう反應するかを、我が民族主義者やロシア人達よりよく知っていたのである。^⑦

何分、事件からこの回顧録執筆まで、ほぼ正確に五〇年が経過している。サウディアラビアの局面に關する限り、この事件はオランダの「手柄話」であつて、ファン・デル・ミューレンが自讃する如く、その最大の功勞者は彼自身であつた。しかし、インドネシアの局面でのオランダの究極的敗退は、一九七〇年代の今日でも彼の視野を遮らぬかの様である。私はここに彼の結論のパロディーとして、同じく三點を掲げて拙稿の結びとしたい。

この事件はインドネシア民族主義運動の三重の轉換期を象徵するものであつた。

一、イスラム教を共通の地盤とするパン・イスラミズムの動きはインドネシア民族主義運動の主流とはなり得なかつた。

二、同様にコミンテルンを頂點とする國際共產主義運動もその影響力を失なつた。

三、オランダ東インド政廳は武装蜂起の結末を完全につけることによって戰術的には勝つたが、國際世論を敵とすることによつて、長い目では戰略的に敗退せざるを得なかつた。

註

- ① J. Vredenburg, "The Haddi: Some of Its Features and Functions in Indonesia," *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde*, CXVIII (1962), 91—154.
- ② *Ibid.*, 146.
- ③ J. D. van Herwerden, *De bedevaarten naar Mekka*, The Hague, 1873; *Id.*, *Toememende bedevaart naar Mekka*, The Hague, 1895; Johan Eisenberger, *Indië en de bedevaart naar Mekka*, Leiden, 1928; Abdoel Patah, "De medische zijde van de bedevaart naar Mekkah," (unpublished Ph. D. dissertation, University of Leiden, 1935); G. H. Bousquet, *Introduction à l'étude de l'Islam Indo-nesien*, Paris, 1938.
- ④ 拙稿「オランダの文書館」『史學雜誌』七六—七（一九六七年七月）五八—六七頁。
- ⑤ これらの文書についての最良の手引書は F. G. P. Jaquet (ed.), *Gids van in Nederland aanwezige bronnen betreffende de geschiedenis van Azië en Oceanië: 1796—1949*, (8 vols.; Leiden: Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde, 1968—1977) の第三卷「第五卷びある」。
- ⑥ 護雅夫・牟田口義郎『アラブの覺醒』（「世界の歴史」第二二卷）講談社 一九七八年、九九—一〇〇、一八二—一三三頁。
- ⑦ 同 一一九頁。

- ⑧ 同 二三二頁。ブノアメシヤン著 河野鶴代・牟田口義郎譯『砂漠の豹イブン・サウドーサウディアラビア建國史』筑摩書房 一九六二年、一八七頁。
- ⑨ ブノアメシヤン、前掲書、一九七頁。
- ⑩ 同 二〇四—九頁。
- ⑪ 護・牟田口、前掲書、九九頁。
- ⑫ ブノアメシヤン、前掲書、一五八、一六〇、一七四—七七、三三七頁。
- ⑬ 護・牟田口、前掲書、一九四—九五頁。
- ⑭ 一九七八年七月八日、オランダ國ノールトウェイク・アーン・ゼー町におけるライデン大學名譽教授ドレーウェス (G. W. J. Drewes) 氏とのインタビュー。
- ⑮ オランダのシマダ領事館設置は一八七二年である。Eisenberger, p. 27.
- ⑯ *Bedevaartsverslag 1345H* (1926—27), Djeddah, 27 April 1928, by Consul, D. van der Meulen, p. 1.
- ⑰ *Ibid.*, pp. 17—18.
- ⑱ *Ibid.*, p. 18; Eisenberger, p. 60.
- ⑲ *Bedevaartsverslag 1345H*, p. 18.
- ⑳ *Ibid.*, p. 27. 勿論當時のサウディアラビア政府にとって巡禮者の入國は尙最大の財源であった。(一九七八年六月三日、オランダ國レイスウェイク市における元シマダ副領事ブベック・カデヤン《Abdoelkadir Widjoatmodjo》氏とのインタビュー)
- ㉑ Vb 5 September 1927 P14; Consul, D. van der Meulen, to the Governor-General, 18 May 1927, は「我々はメッカに代表を持つ唯一の國家である」と記している。
- ㉒ 過去のアラブ内戦時代に完全に消失したコロニーがこの再び五一八三名の人口を擁していた。(*Bedevaartsverslag 1345H*, p. 26.)
- ㉓ 前嶋信次編『メッカ』芙蓉書房、一九七五年、一〇〇—一〇一頁。
- ㉔ Vb 31 January 1927 C2; Dutch Minister in Cairo, A. van der Goes, to the Minister of Foreign Affairs, 31 December 1926.
- ㉕ *Ibid.*; “De Communisten op Java en het Hollandsche gezantschap te Cairo,” *Al Akram*, 28 November 1926. Tr. by Meulen.
- ㉖ *Ibid.*; A. van der Goes to Minister of Foreign Affairs, 4 January 1927. 元高等事務官 Lord Lloyd.
- ㉗ 新聞名はそれぞれ *Al Akram* 及び *Les Débats* である。註⑨の文書及び *Ibid.*, Saudi Arabian Minister of Foreign Affairs, Abdullah al Damludji, to the Netherlands government, Tr. by Meulen. 以下『A・D・V』誌の原記事は結局所在不明のうちに終了した。
- ㉘ Vb 28 May 1927 R8; Meulen to the Governor-General, 14 January 1927.
- ㉙ Vb 5 September 1927 P14; Meulen to the Minister of Foreign Affairs, 17 June 1927.
- ㉚ 元の額は英貨二〇〇〇ギニーと記されている。恐らく年間

の次級總督に當る。

註③に同く。

③ D. van der Meulen, *Hoort gij de donder niet?* (Frane-ker: T. Meyer B. V., 1977), pp. 104—116.

④ Vb 5 September 1927 P14; Circular of the First Secretary of the Netherlands Indies Government to the heads of the administrative offices, 28 June 1927.

⑤ だんぱん George McT. Kahin, *Nationalism and Revolution in Indonesia*, (Ithaca, N. Y.; Cornell University Press, 1952), p. 83; Ruth T. McVey, *The Rise of Indonesian Communism*, (Ithaca, N. Y.; Cornell University Press, 1966), pp. 317—18. 谷川榮彦『東南アジア民族解放闘争史』勁草書房、一九六九年、一三〇—一三二頁。増田與『インドネシア現代史』中央公論社、一九七一年、四六一—四八頁。

⑥ 註③に同く。

⑦ Grusi 中東各地に廣く用ゐられる小錢の單位。

⑧ 註③に同く。

⑨ Vb 28 May 1927 R8; Procureur General, H. G. P. Dufjes, to the Governor-General, 10 March 1927.

⑩ 註③に同く。

⑪ 註③に同く。

⑫ 註③に同く。

⑬ Vb 5 September 1927 P14; Telegram in French, Meulen to Governor-General, 4 June 1927.

⑭ 註③に同く。

⑮ Vb 5 September 1927 P14; Meulen to the Governor-General, 18 June 1927; 22 June 1927.

⑯ *Bedevartsverslag 1345H*, p. 16.

⑰ 註③に同く。

⑱ 附録の文書參照。

⑲ *Bedevartsverslag 1345H*, p. 15.

⑳ Meulen, *Hoort gij*..., p. 112.

㉑ 註③に同く。

㉒ *Bedevartsverslag 1345H*, pp. 16—17.

㉓ William Roff, "Indonesian and Malay Students in Cairo in the 1920's," *Indonesia*, IX (April 1970), 74.

㉔ *Bedevartsverslag 1345H*, p. 17.

㉕ Vb 5 September 1927 P14; First Secretary of the Government, H. A. Helb, to the Director of Finance, 28 June 1927.

㉖ *Ibid.*; Acting Adviser for Native Affairs, Emile Gobée, to the Governor-General, 22 June 1927.

㉗ Meulen, *Hoort gij*..., pp. 109—110.

附 録

ジェッダ領事D・ファン・デル・ミューレン
から東インド總督宛の書簡

ジェッダにて一九二七年六月二二日

拜啓 總督閣下

一九二七年六月一七日の書簡に引き続き、次の事を報告します。

即ち今日ブリュッヘ(Pilghe)を船長とするシンケップ號により、オランダ臣民八人——反オランダ活動を行なっていたとの嫌疑を受け、メッカにおいてヘジャス政府により檢舉された——がサバンに送られます。

今回の巡禮の歸國シーズンの多忙の中で、私はこれまで詳細な報告を送ることが出来ませんでした。

最初私は六月二〇日夜、ジェッダの警察署のバラックにおいて一人ずつ訊問し、私は四人のアラブ兵士達と共に、彼等を船に移しました。これは支障なく行われましたが、ハジ・マルフムは「東インドに送還しないでくれ」と懇願し、それが實現するなら自殺すると公言しました。ハジ・マルフムは再び東インドに歸らぬつもりで、メッカでシェイクの助手(Maidin)として身を立てていたのです。副領事は彼の檢舉に際し、彼の家族の一員から彼に宛てた手紙——警察に押収された——を讀みました。手紙の筆者はその中で彼に、「差當り五—六年メッカに留まるがよい。何故なら國では警察が非常に厳しくなり、お前は直ちに檢舉されるおそれがある」と書いていました。私はこの手紙をメッカ

警察から入手し、閣下にお送りする様努力するつもりです。

マハダル(またはミフダル)はメッカにおける共產黨活動の本来の指導者、兼組織者ですが、我々はまだ彼を捕えていません。

退任した副領事は彼をよく知っており、當地出發前にその隠れ家を發見する勞を取ってくれるでしょう。

ハジ・バギンダ・タンズィはスマトラ西岸地區ブリアマンの反亂で指導的役割を演じた人物です。彼の檢舉と送還は出身地のレシデントから要請されていました。もう一人の西スマトラ人もやはり送還が要請されており、當地でもその指令は廣く行きわたっていますが、まだ檢舉されていません。

同封の八人の訊問調書作成のあとで、私は「一、三の者は無罪、他は微罪」との印象を受けました。彼等についての真相究明の手段は當地では不十分です。バタヴィアやパダンでなら、真相究明は速やかに成功し、無罪の者は直ちに自由の身となるでしょう。八人の中、四人は旅券と切符を持っていますが、二、三の者は密航者で、旅券、切符を持たずに當地に着いています。彼等がメッカに残した荷物、證明書、切符等はなるべく早く送るつもりです。ジェッダの海運代理店に對し、私はこの八人の輸送のための臨時出費を立替え、あとで閣下に請求する豫定です。

この書簡と共に、送還者の名前と陳述の抄録を送ります。なおサバンの行政責任者に伺いたいのは、「西スマトラ出身者はサバンから直ちにパダンへ轉送し、そこで訊問した方がよくはないか」ということです。

領事ファン・デル・ミューレンの

八人訊問のメモ

〔西スマトラ出身者〕

一 アブドゥラー

別名カミルは私と同じモーターボートでシンケップ號に行つた。彼は身體の具合が悪そうに見え、ふるえたりすすり泣いたりした。暫く経つて彼はオランダ語で「これからよい待遇を受けるだらうか、」と私に尋ねた。彼は、自分達はメッカで四日間、の監禁生活中非常に苦しい思いをし、十分な食物を得られなかった、と言つた。彼自身は少し罪があるが、彼は全く罪のない三人の友のことを特に悲しんでいた。その三人とはガンダ、ブシロ、及びリバットである。彼はタンズィの名も擧げたが、タンズィが西スマトラ政廳の特別の要請で送還されるとは知らなかった。彼はさらに「私のあやまちは、幾分かは私の少年時代のせいだ」と言つた。東インドで彼は共産黨（の運動）に熱中し、その地の煽動が嚴罰に處せられると、彼の父は彼を共産黨サークルから救い出し、追及から逃れさせようとした。メッカ巡禮を祖父と共に済ませた後で、彼はアズハル（大學）へ勉強しに行つた。彼は「もはや政治活動に加わらないつもりでメッカに行ったのだ」と公言していた。しかし、彼はメッカでマハダルに誘惑された。彼はマハダルがメッカのカフエで語るのを聞き、その甘言（goede woorden）に魅せられた。これ以前からアブドゥラーは既に團體設立の計畫を抱いて人々の間を行き來していた。それはジャワ巡禮者達の迷信的風習を打

破し、彼等に最も適した待遇がメッカで得られる様にするためであつた。その時、集會が開かれた。マハダルの言葉は餘りにも早く、鋭く政治の領域に傾斜して行つた。マハダルの意圖を知り始めた時、彼はマハダルを議長（の座）から追おうと同志達と話し合つた。本来の宗教的目的はマハダルによつて失敗の危険にさらされた。タンズィ、ガンダ、ブシロ、及びリバットはP I I又はS B Iと何の關係もない。

二 ハジ・バギンダ・タンズィ

彼は激しく逮捕に抗議した。それによつて彼は大きな損失を蒙り、とくに巡禮が果せなくなったのだ。彼はメッカに作られた團體については何も知らない、と言ひ、すべての損害について賠償を要求した。かつてスマトラにおいて共産黨にかかわつたことはなかったのに、事件後二カ月もパダンで捕まつており、その後釋放されてメッカに來た由である。私はそのあとで彼にこう言つた。「君は西スマトラ當局の要請により送還されるのだ。」彼の抗議的態度は一變した。しかし彼は、すべては中傷だと言ひ張り、自分の無實は何れ分るだらう、と主張し續けた。

三 ハジ・マルフム

この男は最も激しく抗議し、「送還されるなら自殺する」と脅した。彼はメッカに於て副領事に手紙を送つたことを認めた。彼はその中でスパイとして活動することを申し出、「釋放されたらマハダル（の居所）を教えて上げよう」と提案してゐたのだ。彼はその説明を私に對して繰返して、こう言つた。「私の同志が私の不幸の原因である。彼等をあなた方に引渡すためな

ら、何でもやろう。」SBIについて、彼は何も知らない。

彼はマハダル、カミル、及びスマディサストラの煽動に乗せられて、會計係としてPIIに加わった。しかし彼はイスラム教と宗教學の研究を進めたいという確信を抱いていた。

宗族の一員から手紙を受け取ったことを彼は認めた。その中で彼は「五、六年メッカに留まる様に」との忠告を受けていた。彼は「私は共產黨とは何の關係もない。もはや東インドには歸りたくない」と語った。彼はハジ・タンスイ、ブシロ、リパットを知らない、と明言した。

四 リパット・パキ・メレーノ (Ripat Pakin Melano) (ソロク出身)

彼はタンスイだけは知っているが、PII、SBIの兩國體とは全く關係がない、と述べた。

五 フンドゥ・グラル・スタン・パムンチャク

彼はシンガポール、ボンベイ經由でジャッタに來た。PIIと接觸したが、これを單なる宗教團體だと思い、そのイニシアルが何の略號かさえ知らなかった、と言う。彼はメッカではコラーンの學習の時などに、絶えずスパイされた。それは人々が彼を政治活動のかどで捕えてやろうと思つていたからである。

〔ジャワ出身者〕

六 ガンダウィナタ (バンドゥン出身)

彼は刑務所に入つて始めてこれらの人々と知り合つた。この事件についてそれ以外には何も知らない。ただカミルとスマディサストラとは面識があつた。彼は兩國體のどちらのメンバー

でもない、と言う。

七 ブシロ

彼はムハマディアの一メンバーであり、メッカの總督エミール・ファイサル (Emir Faisal) の所で、二、三の同志と共に謁見を許され、アル・ハラム (Al Haram) のモスクにおいて講義を行なう許可を申請した。マハダルはこれを聞くとムハマディアを罵倒し、自分の團體を宣傳した。「これ以上マハダルに關することを何も言わないで欲しい」と彼は言う。

八 スマディサストラ (ガルット出身)

〔國營質屋の〕元主任査定官 (hoofschatter) のちに解雇されたが、「メッカ巡禮のための？」財政援助が與えられた。マハダルによつて彼はその團體に紹介されたが、これについて宗教的目的しか知らなかった。

彼はマハダルとガルットで知り合つた。マハダルは彼を送り出すべき巡禮者達をアバス・イラギ (Abas Iragi) に引渡す様、要請した。マハダルは巡禮一人當り二ポンドを約束した。(アバス・イラギについては私の一九二七年六月一七日附書簡、七五八一—〇四號參照。) その後、彼は當地メッカで久しぶりにマハダルと再會した、と言う。

〔署名〕 ファン・デル・ミューレン

The Abortive Uprisings of the Indonesian Communist Party and Its Influence on the Pilgrims to Mecca: 1926-1927

Nagazumi Akira

In the year 1345 of the Muslim calendar (July 12, 1926-July 1, 1927) the number of the pilgrims from the Netherlands Indies reached the unprecedented fifty-two thousand which amounted to 42.6 percent of the total pilgrims of the year. Some reasons are attributed to this phenomenal increase: the native planters in West Sumatra were enjoying the highest prosperity in tropical produce, especially rubber; King Ibn Saud finally brought about unity and stability to Arabia after years of struggle among the tribes of the region; the day ending the fasting period in that year was believed to be unusually lucky according to the Muslim calendar.

The Indonesian Communist Party, abbreviated as PKI, started around the same time premature and sporadic uprisings in Java and West Sumatra, only to be suppressed individually and easily by the Dutch colonial government. This indicated that the period of relatively enlightened colonial policy for a quarter of a century gave way to that of an authoritarian stance, which was to last until the outbreak of World War II. Most of the captured Communist rebels were either executed, imprisoned or exiled to remote islands. Rumor had it, however, that some of them successfully traveled to Mecca where they tried to carry out an anti-colonial propaganda to the Indonesian and Malay pilgrims. The Dutch Consulate in Jidda kept a watchful eye over the Indonesian community in Mecca by stationing there a vice-consul who was Muslim Indonesian.

In the course of a few months the Dutch personnel of the delegation gathered the information that several members of the former Indonesian Communist Party were carrying out a propaganda activity not only for their compatriots but also for local Arabian laborers, though with even less success. The delegation also suspected that there must be at least moral support for this activity on the part of the Russian Consulate in Jidda. The Netherlands home government decided to request its Arabian

counterpart the arrest and delivery of these former PKI members. This put the Arabian government before a difficult choice. On the one hand, it did feel obliged to accept the demand of the Netherlands government which, after all, was the greatest supplier of the pilgrims and, accordingly, the best benefactor to the finances of the country. On the other hand, however, had it fulfilled the Dutch request, it would have been criticized for having captured the Muslims, even if nominal, while performing one of their five cardinal duties. Those who opposed most firmly to the idea were some cabinet members who had taken refuge from Syria then under the French colonial rule. After heated debates King Saud finally ordered the arrest and delivery of the Communists to the Netherlands delegation. They were neither the prominent PKI members nor had they been directly involved in the uprisings. With their repatriation to the Netherlands Indies the probability of a similar infiltration in the future by the PKI remnants seems to have tapered off. The Muslim as well as other protests against the measures taken by the Saudi Arabian government came from all over the world, damaging somewhat the prestige of the king as the ruler of the holy city. The Netherlands government also realized how cumbersome such a request was for both sides.

The Muslim radicals who had cherished some hope of making Mecca the center for struggle with their infidel governments must have discovered that the new regime stood definitely against any political movements. Therefore, the center of these activities shifted from Mecca to Cairo.

The *Nu-P'u* 奴僕 of the Ming Period

Nishimura Kazuyo

The number of *nu-p'u* belonging to the gentry rose markedly since the middle of the Ming dynasty. They were the alienated peasants who fell into servitude through severe taxation and corvée services imposed by the state on one hand, and usury and land amassment practiced by the